

一

次の(1)～(5)の——線部の漢字をひらがなに、(6)～(10)の——線部のカタカナを漢字に改めなさい。

- (1) 器楽合奏の指揮をとる。
- (2) 音楽は情操を豊かにする。
- (3) 逆転ホームランは痛快だった。
- (4) マザー・テレサの尊い志に感動した。
- (5) 沖合に出ると潮の流れが速かった。
- (6) この建物はケイサツシヨだ。
- (7) 土手のホシユウ工事が始まった。
- (8) 試合を前に選手がフルい立つ。
- (9) 石油をセイセイする。
- (10) 応援団長にスイキヨされる。

二

次の①～④の□にあてはまる言葉を、下の意味を参考にして答えなさい。

例 手が □ 届く

細かいところまで気配りがされている。

- | | | |
|----------|-------|----------------------|
| ① 手に □ | ・ ・ ・ | 他の事に気がとられて物事に集中できない。 |
| ② 手を □ | ・ ・ ・ | つづけていた関係を断つ。 |
| ③ 手を □ | ・ ・ ・ | 降参する。 |
| ④ 手に汗を □ | ・ ・ ・ | どうなることかはらはらする。 |

三

次の詩を読んで、あとの問いに答えなさい。

花のやうに雲たちの衣裳が開く

水の反射が

あなたの裸体に縋をつける

あなたは遂に飛びだした

筋肉の翅で。

日に焦げた小さい蜂よ

あなたは花に向つて落ち

つき刺さるやうにもぐりこんだ

聴て あちらの花のかげから

あなたは出てくる

液体に濡れて

さも重たさうに

(村野四郎の詩より)

問一 この詩はあるスポーツ競技を詩にしたものです。その競技の名前を答えなさい。

問二 詩の中の「あなた」は何にたとえられていますか。詩の中の一語で答えなさい。

問三 七行目の「花」とは何をたとえていますか。次の文がその答えとなるように、() にあてはまる言葉を詩の中から抜き出して答えなさい。

プールの水面に映っている()。

問四 この詩には何の美しさが主として表現されていますか。次のア～エの中から最もふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 自然の美しさ
- イ 肉体の美しさ
- ウ 心情の美しさ
- エ 言葉の美しさ

四

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

① 石の道具から鉄の道具へ移り変わることは、人びとの生活や社会にどのような影響をもたらしうのでしょうか。これは遺跡から発掘された石の道具、鉄の道具を見ているだけではわかりません。じつは、一九五〇年代に、バプア・ニューギニアやオーストラリアで石から鉄への移り変わりを研究した研究者がいます。バプア・ニューギニアでもオーストラリアでも、石から鉄への変化は一九世紀から二〇世紀にかけておこった変化なのです。

ニューギニアの東部高地に、「シアネ」という共通のことばで挨拶する人びとがいます。これら「シアネ」を使う人びとはサツマイモやそのほかの農産物をつくり、ブタを飼っています。

かれらはかつて石器を使っていたにすぎませんでした。男も女も起きている時間の八〇パーセントは生きるための労働をしなければなりません。斧は完全に男のもので、労働には石斧を使いました。新しく畑をつくるために森を伐採するとか、木を倒して垣根をつくるとか、建物を建てるということが男の仕事です。女の仕事は育児、食事づくり、ブタの世話といろいろありました。

そこへ鉄の斧が入ってきました。鉄の斧を使うのはどうぜん男です。女のほうは斧は使っていませんから、ぜんぜん関係ありません。鉄の登場は、男だけを解放する結果に終わりました。

そこで、考えてみましょう。重い石の斧と、それにくらべれば軽い鉄の斧では、どのぐらい効率がちがうと思いますか。答えは一对四です。つまり、石の斧で四〇分かつていた仕事は、鉄の斧で一〇分ですみますことができるのです。石の斧で一本倒す時間に、鉄の斧なら四本倒せるということです。刃をとぎなおす時間は計算にいません。

鉄の斧が入ってきたことによって、シアネの男たちは、いままで八〇パーセントの時間を働かなければならなかったのに、五〇パーセント働けばよくなったのです。三〇パーセントの時間が浮きました。では、浮いた三〇パーセントの時間をかれらはどう使ったのでしょうか。

それまでは自分のごく親しい人びとの祭りにしか出席できなかったのが、時間が浮いたので、それほど親しくない人の祭りや儀式にも出席するようになりました。祭りや儀式には宴会がつきものですから、宴会への出席が多くなります。宴会でいち

ばんのごちそうはブタですから、ブタの消費量が多くなります。すると、村はずれに飼っているブタやよその村のブタを盗むということがはじまりました。ブタ泥棒が増えてきたのです。その結果、村と村とのいさかいがおきる、つまり戦争がおきるようになりました。石から鉄への変化は、宴会を増やし、ブタ泥棒を増やし、戦争を増やしたのです。しかも、男たちだけが鉄器時代を迎えたのであって、女たちは石器時代のままでした。これがシアネの人びとのあいだの石から鉄への変化の結果でした。

つぎに、オーストラリアのヨーク半島のつけね、西側にいたイル・イロント族の変化を見てみます。

かれらは食料採集民で、狩りをしたり木の実を集めたりという生活をしていました。かれらにとっても石斧は男のものでした。奥さんや子供が借りることはできましたけれど、借りるとき、返すときのあいさつは、夫は妻に、父は子に優位に立っていることを確かめる機会でした。そこへ白人がやってきて、鉄の斧が入ってきました。イル・イロント族の人びとが白人の手助けをすると、その代償として鉄の斧をくれたりします。ときには、奥さんが鉄の斧をもらうことがあります。夫のほうに石の斧しかもっていないのに、奥さんが鉄の斧をもっていることになりました。そうすると、「すまんけど、おまえの鉄の斧を貸してくれ」ということもおきてきます。このようなことから、意外や意外、石が鉄に代わったことが、夫が上に立ち、妻が下にいるという上下関係をくずしていったのです。これが石が鉄に代わったことでおきたさまざまな結果の一つです。

もっと重要なことは、イル・イロント族が浮いた時間をどう使ったかということです。この点にいま私は大きな関心をもっています。

浮いた時間を使って、なんとかれらは昼寝をしたのです。私はじつは、その部分を読んだときに吹き出してしまいました。③ この笑いには軽蔑の意味もふくまれていたと思うのです。ところが、私のこの感想はじつはまちがっていた、といまは思っています。

石から鉄へと変わってきたときに、弥生人はおそらく浮いた時間で宴会に出席することも、昼寝をすることもしませんでした。石から鉄への変化を、生産力の飛躍的な増大につなげたのです。いままで石の斧が一本倒している時間で、四本倒すというぐあいに、すぐく生産力を高めたのです。

四世紀、六世紀（古墳時代）の農民が働き者だったことは、群馬県で火山の噴火や洪水の直後に復旧工事にとりくんだ証拠

からわかっています。また、日本の農業が草をとればとるほど、よい収穫を約束される農業であることから、弥生農民が働き者だったことを、私は予測しています。

パプア＝ニューギニアやオーストラリアでは浮いた時間を「あ」に使ったのに、日本では「い」に使ったということで、日本人は勤勉だと先祖をほめたたえるつもりか、と思われるかもしれませんが、そうではありません。

④ 道具や技術は、毎年のようにどんどんすぐれたものになっていきます。なんのためだと思えますか。質問すると、すこしでも楽になるようにとか、効率がよくなるようにとか、企業がもうけるためだとかいう答えがよくもどってきます。(1)、結果から見ると、私はそうではない面もあると思うのです。

じつは、私たちが忙しくするために道具や技術は発達してきているのではないのでしょうか。それまで一〇時間かかったところを、三時間で行くことができるようになったとします。浮いた七時間をどう使うかと考えてみると、ほかの仕事をしているのです。

すくなくともつい最近までは、歩いている時間とか車に乗っている時間はポケットとしていたことができませんでした。(2) 空想にふけることができました。しかし、いまや携帯電話ができたのです。歩いていても、車に乗っていても、いつ電話がかかってくるかわかりません。相手からだけでなく、自分からもかけます。なんにもそんなときまでと思うのですが、そんな大人たちが増えています。

私たちは、技術や道具の発達自分たちを解放するためだと思っていますが、じつは大きな誤解で、自分たちを忙しくするために技術や道具が発達している面もあるのではないかと思うのです。(3) 私は思うのです。オーストラリアのイル＝イヨロント族が浮いた時間を寝たというのは、正解だ、と。

※1 多田道太郎さんは、つぎのようなことを私に語ってくれました。

日本には「休む」とか「怠ける」といふことばがあるけれども、みんな悪い意味で使われている。しかし、私たちは、(4) 強制されたことはなにもしないという状況に自分をおくことがたいせつだ。そういう状況のなかで、自由にしたいことをする、それが遊びだ。

多田さんのいうことのなかに、私にとってひじょうに重要なことがふくまれていました。それは、強制されている状況から

は空想力がはばたくはずがない、休んではじめて人間の構想力とか空想力がはばくのだということです。働きづめに働いていると、そのあげくに出てくることは、しよせんたいしたことはないのだということです。空想力は想像力とおきかえてもいい。② アインシュタインが知識よりも想像力のほうがずっとたいせつだ、といっていることを思い出します。

たしかに日本人は働きすぎだと思います。私たちはもうすこし余裕をもって、いい意味での怠惰の精神、遊びの精神で生きていくべきではないでしょうか。これをなによりもまず自分自身にいいたいと思います。⑥ もっと余裕をもって、遊びをもつて生きていったらいいのではないか、それをイル＝イヨロント族に学びたいという思いなのです。

(佐原 真『遺跡が語る日本人のくらし』より)

※1 多田道太郎：フランス文学者・評論家(一九二四～二〇〇七)

※2 アインシュタイン：理論物理学者(一八七九～一九五五)

問一 線部ア「採集」イ「重要」ウ「時間」エ「感想」オ「変化」の中から、熟語の組み立てが異なるものを一つ選び、記号で答えなさい。

問二 本文中の(1) (4) にあてはまる言葉を、次のア～オの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア たしかに イむしろ ウ あるいは エしかし オそこで

問三 本文中の「あ」「い」にあてはまる言葉の組み合わせとして正しいものを、次のア～カの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア	あ	家事・い	農業	イ	あ	農業・い	家事
ウ	あ	採集・い	生産	エ	あ	生産・い	採集
オ	あ	労働・い	遊び	カ	あ	遊び・い	労働

問四 本文には次の一文が抜けています。どこに入りますか。直前の十字を抜き出して答えなさい。

二〇〇〇年前、日本ではどうだったでしょうか。

問五

——線部①「石の道具から鉄の道具へ移り変わることは、人びとの生活や社会にどのような影響をもたらすのでしょうか」とありますが、「石」が「鉄」へ代わったことによっておきた結果としてふさわしくないものを、次のア～オの中からすべて選び、記号で答えなさい。

- ア シアネの男も女も、働かなければならない時間が三〇パーセントも減った。
- イ シアネの人びとにブタ泥棒が増え、そのため村と村とのいさかいが起きるようになった。
- ウ シアネの男たちだけが、祭りや儀式に出席する機会が増えた。
- エ シアネの人びとの男の仕事と女の仕事の区分があいまいになった。
- オ イルⅡイヨロント族の夫と妻の上下関係をくずしていった。

問六

——線部②「シアネの人びとのあいだの石から鉄への変化」は何をもたらしましたか。本文中から十字で抜き出して答えなさい。

問七

——線部③「この笑いには軽蔑の意味もふくまれていた」とありますが、なぜ「軽蔑」したのですか。その理由として最もふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 浮いた時間までも昼寝に使うことをうらやましく思ったから。
- イ せっかく浮いた時間を無駄に使うことがおろかなことだと思ったから。
- ウ ただでさえ睡眠時間が多上に、さらに昼寝をするのは寝すぎだと思ったから。
- エ 睡眠を充分にとることは健康的であり、好ましく思ったから。

問八

——線部④「道具や技術は、毎年のようにどんどんすぐれたものになっていきます。なんのためだと思いませんか」とありますが、その答えとなる部分を本文中から抜き出して答えなさい。

問九

——線部⑤「浮いた時間を寝たというのは、正解だ」とありますが、なぜ「正解だ」と思うのですか。その理由として最もふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 自分たちを解放し、自由に時間を使う行為であったから。
- イ 睡眠を充分にとることが、結果として生産力を高めることになるから。
- ウ 女性の家庭内での地位の向上につながり、男女平等の社会が実現したから。
- エ 日本人の先祖の勤勉さを、より強調することになるから。

問十

——線部⑥「もっと余裕をもって、遊びをもって生きていったらいいのではないか」とありますが、筆者がそう思う理由を、「から」に続く形で本文中から五十字以内で抜き出し、始めと終わりの五字を答えなさい。

五

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

あたしあんなやつともう口きかない、と茜ちゃんが言い出したのは次の休み時間だった。少人数でかたまってお喋りしている女子のグループの中に割り込んでいつては、わざわざ宣言した。私と塔子ちゃんには、職員室の前のあまり生徒が使わない女子トイレで、直接言った。

「カツラはもう、シカトね」

塔子ちゃんは軽くうなずいて同意したけれど、私は納得いかなかったので返事をしなかった。こうやってへんに「しかえし」みたいなことをするから自分まで悪者になるんだ、と思った。

「何か言いたいことあんの、センちゃん」

茜ちゃんが苛立たしげにこちらを見る。真つ黒な猫目が、私を、みずうみの底に沈めるように映っていた。1。

私は情性でうなずいてしまわないように首に力を入れた。さっき、誰にも気付かれないで教室に入ってきたチコちゃんのことを思い出して、小さく息を吸う。

——さからえ、私。

「……あんまりあからさまなことをすると、今度はこつちが悪者になるじゃん。別にシカトしなくても、何か話しかけられたら返事ぐらいすればいいと思う」

言葉はすらすらと出たけれども、頭の芯は冷たかった。茜ちゃんがそれに答えなくてじつと私の目を見たので、余計ぴりぴりした。

①でも茜ちゃんは、途中でふつと目を横に逸らして言った。

「まあセンちゃんはそうすりゃいいよ。センちゃんは」

とりあえず「シカト」は私の身に降りかからない。私は学校からの帰り道を、前と同じように三人でたどる。

カツラちゃんには「シカト」が降りかかった。彼女はどこのグループにも属していないので、それまでは気まぐれに色んな

子と話したりしていたんだけど、みんな応えなくなった。でも、カツラちゃんには仲良しの男子が居る。平気な顔で学校に来て、げははとかひやははとか笑い声を立てている。

しかも、前と変わらない調子でいきなり女子に話しかけることがあった。話しかけられたほうがびくついて、思わず返事をしたり、逆に息を止めてしまったりしているのを、何度か見た。

そうして私も気まぐれに声をかけられる。

「センリ、それ暗号？ あるなしクイズ？」

社会科の時間。気付くとあれから一週間が過ぎていた。茜ちゃんと塔子ちゃんが教材室まで二枚目のモゾウシを選びに行っていて、私はひとりで残されていた（男子ふたりもいたけど、例によってゲームの話ばかりしていた）。そこに、一メートル定規を運んできたカツラちゃんを通りかかったのだった。私の手元には、チエミの歌の詞があった。ひまつぶしにノートに書いてみたやつ。

あかいめだまのさそり

ひろげたわしのつばさ

あおいめだまのこいぬ

ひかりのへびのとぐろ

私はしばらくカツラちゃんの顔を見てぼかんとしていた。きっとものすごい間抜けな顔をしていたと思う。声をかけられても無視しないぞしないぞ、と思っていたのに、いざとなると頭の回転が止まってしまう。多分、長いこと口をきいていなかったからだと思う。

でもカツラちゃんは、ノートを指したまま嬉しそうに言った。

「あたし、これわかったよ」

そのひとりで、頭が動き出した。椅子から立ち上がるくらいの勢いで「え、何！」と身を乗り出すと、うす黄色い八重歯をのぞかせた笑いが返ってきた。

「星座」

「えっ？」

私が聞き返すと、カツラちゃんはひとつひとつフレーズを指しながら説明した。

「さそりでしょ、わしでしょ、こいぬ、へび、全部星座にあるやつ。さそり座は赤い星があるから、『あかいめだまのさそり』なんでしょ。他ののは、よく知らないけど」

私は思わずノートの隅をにぎりしめた。

「そっかあ。そうなのかあ。全然思いつかなかった」

そう言うときカツラちゃんは、「兄ちゃんが星好きでね、天体望遠鏡持ってるんだ」と自慢げに口を歪めた。それからこっちに顔を寄せて、「すっげー高いやつ。こればかりはでかくて盗れないけど」と囁いた。

「ひと言余計だよ」

私が言うとき、カツラちゃんは、今度は歯を見せないで笑った。ほっぺたがふくつと上がる。そのままドアのほうに目をやると、何も言わないで自分の班のほうに走っていった。茜ちゃんと塔子ちゃんが、ピンクのモゾウシを持って入ってきたところだった。

「げえ、ピンクかよ」

イシバタがぼやく。茜ちゃんが「この色、すっごい探したんだからねー」とちぐはぐな答えを返し、和也くんが「さ、字の配置決めよつか」と仕切り直した。その横で私は、じつとノートに目を落としていた。早く帰ってチエミに言いたい、と思う。

「あんたの歌、あれ、星座でしょ」って言ったら、チエミはびつくりするかな。私がカツラちゃんにびつくりしたみたいに。

その夜は眠くならなかった。チエミの歌が始まって。寝たふりをしてからずばっと「星座でしょー」と言い出すんだと思ったらずいぶんどきどきした。茜ちゃんににらまれたまま口を開いた時よりずっと、たくさんの汗が出た。

「星座ー」

布団からがばりと身を起こしてチエミを指さす。チエミはちよつと布団の下の背中をびくつかせて、それからうつとうしそくに頭を出した。毛布から顔の上半分だけ出してこちらを見る。後悔しかけた私の目を、チエミはじつとのぞき込んだ。

「……そりゃそうだけどさー、もしかしてねえちゃん、この歌知らないの？」

「は？」

チエミの作詞作曲だと思っていた私は、問いの意味を理解するまでに時間がかかった。誰かの、しかも有名な人の歌だったということらしい。

あつけにとられた私に、チエミが「宮沢賢治」と、ひと言放つ。

「そうなの？」

「そうだよ」

もしかして、ずっとなぜなぞ歌だと思って考えてたの、とチエミが言ったのにうなずくと、大声で笑われた。

「何、ずっと考えてたの、こんなの？ えー？」

ばかじゃん、とチエミは言った。でもそのまま、あ起き上がって手招きした。ちよつと来て、とすぐ隣にあるふすまを開ける。お父さんとお母さんの寝室の六畳間。ふたりともまだ居間に居るのか、姿はない。隅に布団が積んであって、真ん中にはい闇が集まった空間があるだけだ。私たちふたりは何とはなしに背中を丸めて、う部屋に入った。

「見て」

チエミが囁く。指さした先、天井の照明の右側に、小さな点が七つひかっていた。デンキのあかりじゃない、蛍光塗料のえしたひかり。そのひかりでできた七つの点がひしゃくのかたちを描いていることは、すぐにわかった。

「北斗七星？」

私が言うとき、チエミが隣で小さくうなずいた。

「あたしぜんそくだったじゃん。だから、夜の冷たい空気はよくないと言って、星、見られなくて」

「うそ」

全然知らなかった。でも私は、チエミが小さい頃、お父さんとお母さんに守られるようにこっちの寝室で眠っていたのを憶えている。つまり、この星はチエミのために天井にくつつけられたのだ。お父さんかお母さんの手によって。

「あの歌も、お母さんがうたってくれたんだよ。ねえちゃん、ぐっすり寝てたから知らないんだらうけど」

暗闇に慣れてきたのか、横を見たらチエミがまぶしそうに偽物の星をおおぐのが見えた。私は「そっかあ」とだけつぶや

いて膝を抱える。布団の中で、お母さんの歌を聞きながら、チエミはきつと今と同じまぶしそうな顔をしていたんだろう。私が知らない顔は、まだいっぱいある。チエミにもカツラちゃんにも、クラスの他のみんなにも、多分。うんざりしたり、さみしくなったりするのはまだ早いんだ。

そう思ったら久しぶりに、なんだか安心してしまつて、早くもまぶたが下りそうになった。

⑥ マングミたいな星形に切り抜かれた蓄光チップのひかりが七つ、私とチエミを照らしている。

(豊島ミホ『夜の朝顔』より)

問一 1 にあてはまる言葉として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 冷たく深く イ 固く厳しく ウ 悲しく寂しく エ 滑らかにつややかに オ 朗らかに柔らかに

問二 〰〰〰線部「あからさまなこと」とありますが、「あからさま」の意味としてふさわしくないものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア おおっぴらに イ あきらかに ウ はつきり エ 表だって オ おおげさに

問三 あ え にあてはまる言葉を、次のア～カの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア さつさと イ うつすらと ウ ふわりと エ ぼっかりと オ むくりと カ こっそりと

問四 線部①「でも茜ちゃんは、途中でふつと目を横に逸らして言った」とありますが、この茜ちゃんの行動の理由として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア センリの他にも話をしなければいけない子がたくさんいるので、これ以上相手にしている時間がなかったから。
イ 自分の言うとおりにならないセンリにいらだちながらも、センリの考え方にも納得し、認めるしかなかったから。
ウ 考えを押しつけ、自分の申し出にのろうとしないセンリにいらだち、もう相手にしたくないと思ったから。
エ 良い子を演じるセンリに嫌気が差しながらも、センリとの友達関係を崩したくないため、焦ったから。
オ 話題のカツラがこちらに向かってきたのに気が付いたので、目を合わせたくなかったから。

問五 線部②「それ」とありますが、「それ」が指示する内容を本文中から七字で抜き出して答えなさい。

問六 線部③「頭の回転が止まってしまっていた」とありますが、その様子を具体的に表している一文を本文中から抜き出し、始めと終わりの五字を答えなさい。

問七 線部④「何も言わないで自分の班のほうに走っていった」とありますが、なぜこのような行動をとったのですか。その説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア これ以上センリと話すことはなかったので、一緒に作業している仲の良い男子のもとに帰りたいから。
イ 「ひと言余計だよ」という言葉が胸につきささり、センリと会話をすることが苦しくて涙がこぼれそうだったから。
ウ 茜ちゃんたちが来たことに気が付き、自分と話しているとセンリが仲間の中で辛い思いをするだろうと考えたから。
エ 女子はだれも話してくれなかったもので、センリが自分と会話してくれたことがうれしくて涙がこぼれそうだったから。
オ センリとだけ話し込んでいると他の女子から嫌われてしまう可能性があったので、さつさと話を切り上げたから。

問八——線部⑤「チエミがまぶしそうに偽物の星をあおぐのが見えた」とありますが、このときのチエミの様子として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 両親の愛情を実感し、昔の出来事をなつかしく感じている。
イ 偽物でも明るく輝く天井の星々に、感動が込み上げている。
ウ 暗い部屋に目が慣れていたので、急に感じた明るさに目がくらんでいる。
エ 苦しかったぜんそくの発作を思い出し、思わず顔をしかめている。
オ 今では自分の目で見ることができると大好きな星空を思い出し、満足している。

問九——線部⑥「マンガみたいな星形に切り抜かれた蓄光チップのひかりが七つ、私とチエミを照らしている」とありますが、このときのセンリの気持ちとしてふさわしくないものを、次のア～オの中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 気まぐしくなっていた友達との関係が、これから少しずつ良い方向に変化するのを期待している。
イ チエミのおかげでなぞなぞ歌の秘密が解明し、気持ち晴れて明るい気分になっている。
ウ 大人ぶって小さかった頃のぜんそくの話をするチエミの様子を、ほほえましく思っている。
エ 心も体も少しずつ成長しているチエミと自分が、両親の愛情に包まれているのを実感している。
オ チエミばかりがかわいがられているとさみしく思っていたが、両親の思いを理解してほっとしている。

問十——線部「宮沢賢治」とありますが、宮沢賢治の作品として正しいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア『蜘蛛の糸』 イ『こころ』 ウ『走れメロス』 エ『友情』 オ『銀河鉄道の夜』